研究ノート

『燃える軌道』を読む

下程　息

『徳川家康』を代表作とする、山岡荘八が廣池千九郎を主人公とする伝記小説『燃える軌道』（一九七四―一九七八）を書いたのは何故だったのだろうという、疑問を当初は抱いていたけれども、その理由を第五巻八八頁以下の叙述を目にしてはじめて知ることができた。

終戦後、海音寺潮五郎たちと行った『日本史を語る』という座談会において、夕刊紙に掲載中の『徳川家康』の愛読者であった廣池千九郎の長男千英が、父の伝記を書くよう依頼した結果、この作品が誕生したわけであり、作者がここで告白しているように、まさに「奇縁」というのほかはない。山岡は読者を作品の世界にぐいぐい引き込みながら、最後にこういう種明かしをするという、筋展開のなかにこの物語の名人の老獪巧妙な「遊び心」が見出せよう。本書の読書中同時に想い浮かべたのは、二〇〇一年に刊行された『伝記　廣池千九郎』であった。本長篇はこの『伝記』の小説化となっていると言えよう。

これら双方の大著は共に考証と実証ぬきには書けない。考証も実証も対象に対するその内面からの具体的な理解に裏付けられたものでなくてはならない。けれども如何に緻密な資料であっても、不明瞭で立証不可能な部分を残しているという、事実は避け難い。当時の実際の事実との間のギャップを完全に埋めることはできない。ある特定の過去を掘り起こして記述するためには、資料を適宜取捨選択し、そのなかから現代に通じる普遍的なるものを摘出していかねばならない。その際に死命を制するのは、資料の「選別の呼吸」（谷沢永一『司馬遼太郎エッセンス』三〇頁、文春文庫、一九九六年）である。すると、著者のイマジネーションがこの場でどうしても入ってくる。必要なのは、

歴史のなかに生きていた、人間の言動や足跡を人生のリアリティそのものとして把握し得る想像力と筆力である。双方の大著は共にこの条件を十分に満たしている。『燃える軌道』は文学作品、すなわち「フィクション」であるから、著者のイマジネーションは、『伝記　廣池千九郎』の場合よりもはるかに広く自由な「遊戯空間」において展開されている。本作において作者は、瀕死の病いから奇跡的に再生し、度重なる挫折の体験を糧として人間教育の智識と方法を究明し、教育の霊場「廣池学園」を建設した、廣池千九郎の壮絶さと誠実さを極めた生涯を「燃える軌道」として活写している。そして、折々の淡彩な挿絵が錦上に花を添えている。小生がそのなかから汲み取ることが出来たのは、歴史、人生、人間にかんする豊富な知見と叡智であった。人間学について得がたい勉強をすることができたのは、望外の収穫であった。そういうわけで、とりわけ小生の心の琴線に触れた当該諸問題をここで以下項目的に記し、コメントしていくことにしたい。その際、本長篇からの引用にかんしては、その出所を巻数と頁数を算用数字で括弧内に記入する。

＊

1　「……逆境を光に変える……」（1―89）よう尽力しようと思うならば、「……四面楚歌などというものは、現実としては人間の弱音に過ぎない」（1―342）。これが若い廣池千九郎が掴んだ人生観であった。精神の熟成とはまさにこのことをいうのであろう。

2　この廣池千九郎は、「もう一段高い位置から新しい世界を見やり、自分を見下ろ（す）……」（2―42）ことができるようになった。

3　「バカ即怠け者」（2―156）。というのも、人間の生涯は、努力によって決定する（2―214）。このテーゼは、「誰でも、断えず努力しているものは、／われ等が救うことができる」（森鷗外訳）という、ゲーテ畢生の作『ファウスト』の結びの天使たちの合唱と共振共鳴するところがありはしないだろうか？

4　「彼（廣池千九郎）は歴史を以て何処までも人生を旅する人間の道標たらしめようと苦心している」（2―265）。これは作者山岡荘八の創作作法となっているが、作風や思想は違うけれども、このことは司馬遼太郎の歴史小説についても言えることではなかろうか？

5　「人間がこの世に生きてある限り、眼に見えない何者かが、何処かで自分を庇護してくれているものらしい」（2―270）。ゲーテの諸作品は、作者の主人公に対するこの註解と同じ内容を人生の奥義として主題化していた。また、教育哲学者故O・F・ボルノー教授は、廣池学園に出講されたときに、このテーゼを人生の究極の真実として披露されはしなかったろうか？ちなみに以上の問題提起が行われたのは日清、日露両戦争中の

ことであった。以後、日本は日露戦争で奇跡の勝利を博し、ロシアの南進を阻止しようとする欧米列強の支援を得、日英同盟が締結され、日本の国際上の地位は向上の一路を辿っていた。

6　廣池千九郎はこの間、今まで世界の法律ではほとんど扱われていなかった中国の法律にかんする論文を書き、斯界の泰斗穂積陳重東大教授の下で法学博士の称号を得る。これはそれこそ異例中の異例であった。それから神宮皇學館の教授となり、天理教の指導理念である「マコト」（3―86）という教理に信服し、天理教に入信し、その考究と実践に没頭する。その結果、天理中学の校長に抜擢されたけれども、極度の過労のために、「病院の医師は、すでに絶望を宣言していた」（3―170）。けれども、「当時はまだ卑俗な迷信的宗教としか思われていなかった天理教」（3―180）の信仰によって起死回生し、その布教に没我の献身を続けていた。けれども、その無私無欲なるが故に一途一徹な情熱が災いし、周囲の当事者との間の軋轢が生じ、辞職を余儀なくされる。著者山岡は語り手として一段高い視座に立ち、何処にも見られる人間関係のこの生臭い現実をこう解読している。「人間にある感情の確執や、人間的な、あまりにも人間的な陥穽や画策は、つねに却ってより正しいもの、より偉大なものを全面的に押しだしていく原因になるものだ」（3―260）。だからこそ廣池千九郎はこう言い切ることができたわけである。「……しかし、私から信者同士としての諸君に語りかける自由や、交際の自由まで奪おうとしてはいません。したがって、今度のことも私にとっては、神の試練であったと素直に受け取り、さらば、汝は何を以て神の恩に報ずべきや？　その道を真剣に求めてゆこうと努力するばかりです」（3―262）。

7　廣池千九郎は東京へ戻る。天理教会での締め出しは、この廣池にとっては、逆により広い世界への道となっていた。その学問的業績によって講演の依頼は殺到するし、健康を取り戻す。あまりにも直情径行であってこだわり過ぎの性格も温和になり、心の余裕を身につけはじめた。「……報恩のマコトを尽しながら賢明に衝突を回避し、有終の美を飾る道を歩み出そうとする覚悟……」（4―24）を固める。この「……成人への開眼」（4―32）は「神の恩寵」（3―263）としか言い表しようのない人生の奇跡であった。ここで廣池千九郎は、天理教団と縁を切り、別種の団体として「モラロジー」を発足させる（4―286）。伊勢神宮で再出発を誓い（4―306）、学問体系に基礎づけられた道徳の体系、すなわち「モラロジー」の体系の確立に全身全霊をもって専一しはじめた。そして、このライフワークを完成すると共に、その教育と実践の場を柏市に建立した。現在の廣池学園の原点はここにある。

8　一九三二年五・一五事件、一九三六年二・二六事件が起こる。日本は国際連盟を脱退、世はファッショ化に向かう。廣池千九郎は、暴動、ストライキ、普通選挙、権力の交替等、当時

の日本の政情不安定化に反対していた。その結果生じるのは、混乱と修羅場の繰り返しであって、事態は何一つ変わらない。廣池千九郎は以下のように憂慮していた。

とにかく日本はこのまま捨てておくと、ぬきさしならない戦争の深みにのめりこんで行きそうな気が頻りにする。それを腕を拱いて許してしまったのでは、それこそ日本自体がどうなるかわからなかった。（4―128）

廣池は、「あらゆる問題を良心と歴史に照合しながら、闘病と思索を重ね……」（4―230―231）ながら、時代の雲行きを観察していた。その結果、当時のこのような窮境は、利己心、利害打算、権勢欲に起因するものであって、ここでどうしても必要となってくるのは、世間並みの「普通道徳」の次元を超えた「最高道徳」であると確信するようになる。そして天理教本部から離れ、「この世上の理を科学的に現して、神の実在を証明していく……」（4―162）学問「モラル・サイエンス」の、すなわち「モラロジー」の体系を樹立したわけである。この「モラロジー」が至上令としていたのは、「慈悲寛大、自己反省」（4―173）、「自我没却の原理」（5―42）、「すべての伝統に感謝……」（5―138）、「品性の練磨」（5―169）、「人に尽すことに徹し、運命を拓く軌道……」（5―169）を歩むことであった。それは「大悟の境地」（4―220）への道となっていた。以上の詳細については、先に挙げた『伝記　廣池千九郎』を参照されたい。

筆者はここでついでながらこう問いたい。セックスやエロスの問題を廣池千九郎はどのように考えていたのだろうか？

＊

山岡荘八のこの作品、読んでいて面白い。筋展開のテンポは快適で歯切れよい。歴史、人生、人間性の勘所を適確に押さえている。その叙述は簡潔明快で分かりやすい。全体は、この作家の他の作品群と同じように、小説らしい小説となっている。その「語り」の巧さはそれこそ堂にいっている。けれども、廣池千九郎と徳川家康を並列して、モラルの観点から双方の等質性を指摘しているのは問題ではなかろうか。その当該個所を引用するならば、

博士（廣池千九郎　筆者注）は両者を次のように分析している。

豊臣秀吉（一五三六―一五九八）

〈特色・プラスの点〉

一、不世出の英資。

二、知勇など諸力に優れる。

三、国家伝統の上に立って戦争した。

四、若年時は道徳的。
〈マイナスの点〉
晩年の驕怠。
自身も家臣も知勇のみ。
守成期に入って道徳によらず。
良い家臣に恵まれなかった。
徳川家康（一五四三―一六一一）
〈特色・プラス点〉
一、父祖の余徳。
二、天性温厚かつ篤実。
三、競争心がなかった。
四、道徳の基礎に立っている。
五、学問を学び、武士道のいい点を体得。
六、行為の標準が大義名分の上にあった。
七、守成期に道徳を奨励した。
八、家臣に恵まれた。
九、道徳の師を用いた。
〈マイナス面〉
特に記述なし。

つまり、博士は、徳川家康を天道の原理をわきまえ、道徳を重んじた人物として高く評価している。……。博士は、側近にこう語っている。これは博士の学者・教育者としての家康論だが、筆者もまた、小説家として家康に近づき家康の人柄や経世の実際を知るにつけ、家康が如何に神仏を崇め、人の誠忠を大切にしたか、そこに実は世界最長政権が樹立された要因があったと信じている。（5―50―52）

私見を申すならば、廣池千九郎の当座の言辞に依拠した、こういう家康賛美は楽観主義的かつ単純すぎはしないだろうか？というのも、前者は教育者であり、後者は政治家であるという、厳然たる事実を押さえずに両者を俎上に乗せるのは、想いが先に立っていはしないだろうか。それは、作家特有の性癖ではないだろうか？　後者の政治家としての所業の手練手管についてはこの作品では言及されていないに等しい。その代表作『徳川家康』によれば、冷徹慎重な現実主義に即してその場その場で駆使してきた、その数々の権謀術数も当時のわが国に秩序と平和を確立するための必須必然の方策であって、その政治力を大乗的な道徳の立場から容認し讃えねばならないというわけである。作家の場合、異なった諸契機が客観的に区分けされずにその連想作用の中に融解されていってしまう場合は、創作上しばしば見られる現象である。だから作家の問題把握が主観的、それとも一面的となってしまうことは、別に珍しいことで

はない。ここにおいて、徳川家康と廣池千九郎が二重写しになってきていはしないだろうか？

最後に「モラロジー」にかんする記述に目を向けるならば、全体は要約、それとも紹介の域を出ていない。ここに本作の限界があることも認めなければなるまい。この長篇の問題点はここにあろう。したがって、父下程勇吉の行った類の「モラロジー」にかんする人間学的省察（＊）が叙述に挿入されていたならば、本作はより底深いものになったのではないだろうか？とはいうものの、作家にこういう学問性を要求するのは望蜀である。だからこそその対錘として、「モラロジー」を学問研究の立場から根底的であると同時に客観的に解読し評価する仕事がどうしても必要となってくるわけである。

以上が筆者の偽らざる読後感である。

＊下程勇吉著『廣池千九郎の人間学的研究』（モラロジー研究所出版部、二〇〇五年）参照。